



ウランバートル市の廃棄物管理 —ごみ料金徴収システムについて—

国際航業(株) 国際協力事業部 Ichiro Kono
都市マネジメント部 部長 河野 一 郎

1. はじめに

当社とモンゴルとの関わりは、2004年11月に開始された「モンゴル国ウランバートル市廃棄物管理計画調査（JICA 開発調査）」の実施にさかのぼります。

この開発調査は2007年3月に終了しましたが、引き続き開発調査で策定したマスタープランの中から、優先事業を日本の無償資金協力を得て実施することになり、その設計監理業務を2009年3月まで受託しました。今回は、この一連の廃棄物管理の改善事業の中からごみ料金の徴収システムについて紹介いたします。

2. ウランバートルの廃棄物の問題

モンゴルといえば、チンギスハーン、馬に乗った遊牧民を思い浮かべる人も多いかと思いますが、首都ウランバートル市にはモンゴル全体の4割弱にあたる約100万人の国民が生活しており、市場経済への移行に伴って消費生活が変化し、排出されるごみ量が増加して廃棄物管理に係わる問題が深刻化していました。

ウランバートル市は都市が形成された経緯から、都市計画に基づいて道路、上下水道、温水暖房などインフラの整備されたアパート地区と、その周辺にまったく無秩序に地方の遊牧民が定住を始めたゲル地区に分けられます。しかしその周辺とはいってもウランバートル市の人口の半分はこのゲル地区に住んでいます。

アパート地区についてはごみ収集がほぼ100%行われているのに対して、ゲル地区については5割以下の人々にしかごみ収集サービスが提供されておらず、これが不法投棄の原因ともなっており早急な解決が望まれていました。

社会主義の時代には、100%収集が行われていたにもかかわらず現在はなぜこのような状況になってしまったのでしょうか。それは資本主義になって効率化を求めた結果、収集事業を民営化し、料金を支払う住民からしかごみを集めなくなってしまったことが一つの原因と考えられます。

ごみ収集料金については、払えるのに払わない人と経済的に払えない人がおり、経済的に払えない人には払える人がある程度を負担するという制

度（クロスサブシティ）を導入する必要があります。そのためには料金徴収方法や徴収者などシステムそのものを変えていく必要がありました。

3. ごみ料金徴収方法の変更と料金の改定

日本でも最近ごみ収集の有料化を実施する市町村が増えてきましたが、ごみ処理料金の一部の負担にとどまっているようです。しかしウランバートル市は、住民や事業者から直接ごみ収集料金を徴収して、その収入のみでごみ収集事業を行っています。また市場経済の流れに沿って、適切な管理体制を整えないままごみ収集事業を民営化したことで、廃棄物処理の基本である街を衛生的に保つと言う第一の目的が軽んじられ、収集業者は利益を上げることに集中するという結果となりました。

そこで調査ではお金を払えない人にもごみ収集サービスを提供できるよう、収集料金は一度廃棄物管理基金に納め、そこから各収集業者に支払われるように料金システムの変更を提案したところ、相手国関係者の賛同を得て調査の終了前であるにもかかわらず、2007年1月から市の条例を改訂し料金システムが変更されました。また収集システム改善のフィージビリティ調査の結果に基づき、ごみ料金の改訂も行われました。

4. 今後への発展

現在料金システムの変更もあり、ごみ収集量は飛躍的に増加しましたが、一方では廃棄物管理基金の組織内で、ごみ収集料金の目的外の使用などの問題も発生してきているようです。廃棄物管理は、市民生活に直結する日々の業務です。唯一絶対の改善策はなく、日々刻々とかわる状況に合わせて絶えず改善していかなくてはならないことを実感しました。

またこれからはモンゴルにおいても、ごみを集めて生活圏から排除するだけではなく、発生そのものを抑制したり、発生したものをリサイクルに回したりするという3Rsの促進も進めていかなくてはなりません。色々と課題はありますが、今回の経験がきっかけとなり、一步一步彼ら自身が改善していくことを期待するとともに、今後とも息の長い協力、支援が続けられればと考えています。